

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	鄭子路
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
<p>多元文化の時代における「エスニックな美学」 ——<日本美学>の構築に向けての<幽玄>の研究——</p>			
論文審査担当者			
主査	教授	青木 孝夫	印
審査委員	教授	桑島 秀樹	印
審査委員	教授	荒見 泰史	印
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、<日本美学>を、多元文化の時代に「エスニックな美学」として構築するべく、戦略的に<幽玄>に注目して研究・解明している。「幽玄」の究明に、現代的な研究方法と研究主体のアイデンティティへの問いを取り入れることによって、<日本美学>の構築という困難な課題に挑戦した。以下の5章で構成される。</p> <p>序章では、日本の美学研究のあり方を問題として研究対象・背景・目的・方法論を考察する。近代西欧中心主義的美学でなく、それに対抗する民族至上的な美学でもなく、本論は、相互尊重の多文化主義に基づき「エスニックな美学」を提唱する。その戦略的研究対象として<幽玄>に注目し、現代的な研究方法で、多元文化に於ける<日本美学>を構築する理由と課題を説明している。</p> <p>第一章では、日本の近代美学史を整理している。具体的には、①諸先行研究を概観した。②訳語「美学」の確立を、中国における早期の用例、西周および中江兆民の三段階に分けて考察した。③日本の講壇美学の系譜を整理し、フェノロサとケーベルを重点的に考察した。④東京大学が講座の名称を「審美学」から「美学」に改めた理由を提示した。</p> <p>第二章では、日本近代美学史に即して幽玄論を振り返る。具体的には、森鷗外と石橋忍月の「幽玄論争」を取り上げ、鷗外の西欧中心的な立場を示した。ハルトマンの思弁美学に対し、経験論的契機を強調する幽玄論を展開した代表的論者である大西克礼・久松潜一・岡崎義恵を論じる。</p> <p>第三章では、<幽玄>の意味変遷史を通し、存在論的・様式論的・美的理想という視角から解明する。具体的には、①<幽玄>の中国の最初期の使用例まで遡り、古代中国人の死生観、宇宙観を指摘した。この用語は「形容詞」へと世俗化したが、芸術批評用語には達しなかった。②『古今和歌集・真名序』などの和歌論を分析し、様式としての<幽玄体>の成立を藤原俊成・定家の時代に位置づけ、藤原親子の<幽玄体>が<余情妖艶体>や<行雲廻雪体>さらに<艶</p>			

美>あるいは華麗な美しさに結び付けられる歴史的過程を記述した。③<幽玄>を美意識論の観点から分析し、西洋近代の美的範疇である「崇高」との比較を通じて、その特質の解明を試みた。幽玄という一例を通じ、この美的範疇の非還元性と特殊性を認識することは、「エスニックな美学」としての<日本美学>の樹立に向けての実践的出発点になる、と主張する。

終章では、学説史の解釈による<幽玄>研究を試み、幽玄研究自体にとって意義を持つのみならず、<日本美学>の構築にとっても有効であることを示す。<幽玄>は<日本美学>の構築を支える柱であるが、ほかの柱もある。これら西洋と異質な建築素材を使って<日本美学>を創出することは、現代人の生活・思想スタイルに応じた日本の美学の創出である。これを実現するには、世界に通用する学問的方法を採用し、盲目的な国際主義や標準美学の概念を捨て、文化の歴史的風土や特異性を認める方法論的また思想的反省が必要である、と総括した。

以上の五章は、日本の近代美学やその研究姿勢を検討・吟味する序章と一章よりなる前半部、幽玄を扱う二章と三章の後半部に分けられる。この前半と後半の論の展開には、連続もあるが齟齬もあり、問題もある。しかし、近代を中心に歴史的資料を博搜・調査し、雄大な構想のもとに従来の幽玄論をまとめて、多元文化の観点から、一つの日本美学の構築を模索・実践したことは、従来にない学術的企画として有益であり、斯学に貢献している。

また、本論文には詳細な「日本近代美学史年表」、また近代の「幽玄論一覧表」の書誌が付されており、この方面の研究者にとって貴重な資料である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1, 500字以内とする。